

# 2019年の漁況

吉田太輔・金元保之・安原豪・内田 浩

## 1. まき網漁業

### (1) 漁獲量の経年変化

図1に1960年(昭和35年)以降の島根県の中型まき網漁業による魚種別の漁獲量の経年変化を示した。

2019年の総漁獲量は約5万2千トンで、前年(2018(H30)年、以下同様)比66%、平年(2014(H26)年~2018(H30)年の5ヶ年平均、以下同様)比59%であった。また、CPUE(1統1航海当り漁獲量)は32.0トンで、前年・平年を下回った(前年比68%、平年比64%)。2003(H15)年以降、長期的にみるとCPUEは増加傾向にあったが直近2年は減少傾向にある。なお、2019(H31)年の漁労体数は11ヶ統(県西部3ヶ統、県東部8ヶ統)であった。

本県のまき網漁業の漁獲の主体は、1970年代後半~1990年代前半のマイワシから、1990年代後半にマアジに変遷し、2011(H23)年までは同種が漁獲を支える構造にあった。ところが、2011年にマイワシの漁獲割合が急増し、以後マアジ、サバ類とともに漁獲を支える主要魚種となっている。魚種別の動向をみると、ウルメイワシ(総漁獲量29%)、カタクチワシ(同5%)は前年を上回り、マアジ(同30%)、サバ類(同16%)、マイワシ(同5%)は前年を下回る漁況であった。

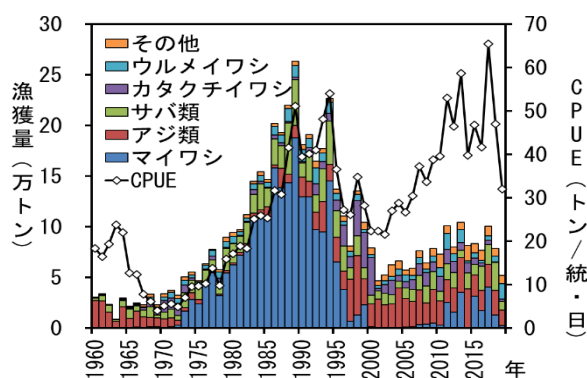


図1 島根県の中型まき網漁業による魚種別漁獲量とCPUEの推移(2002年までは農林水産統計値、2003年以降は島根県漁獲統計システムによる集計値)

### (2) 魚種別漁獲状況

図2~6に島根県の中型まき網漁業による魚種別月別漁獲動向のグラフを示した。

### ① マアジ

2019年の漁獲量は約1万5千トンで、前年・平年を下回った(前年比63%、平年比61%)。

漁獲の主体は、冬季が2歳魚(2017(H29)年生まれ)、春季以降は1歳魚(2018(H30)年生まれ)であった。山陰沖ではマアジは春から初夏にかけて、まとまった漁獲があるが、4月~7月の漁獲量は約8千6百トンで前年・平年を下回る漁況であった(前年比60%、平年比81%)。また、秋季(9月~11月)の漁獲量は約1千6百トンで不漁であった前年・平年を大きく下回る漁況であった(前年比60%、平年比25%)。

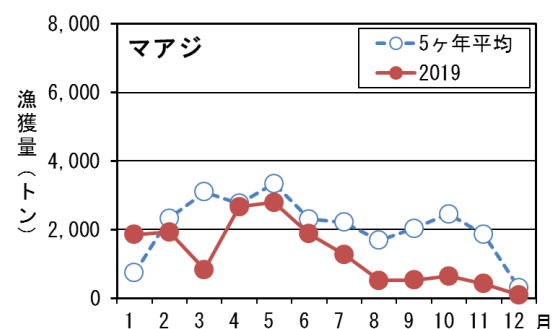


図2 中型まき網漁業によるマアジの漁獲量

### ② サバ類

2019年の漁獲量は約8千5百トンで、前年・平年を下回った(前年比31%、平年比44%)。

漁獲の主体は、冬季がマサバ1歳魚(2018(H30)年生まれ)、夏季以降はマサバ0歳魚(2019(H31)年生まれ)。

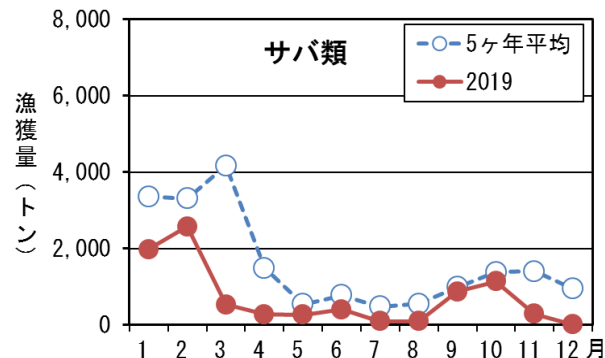


図3 中型まき網漁業によるサバ類の漁獲量

年生まれ)であった。山陰沖ではサバ類の漁獲は例年、秋季～翌春が好調であり、4月～9月にかけては低調となる。本年の冬季(1月～3月)の漁獲は約5千トンで、前年・平年を下回った(前年比37%、平年比47%)。また、秋季(10月～12月)の漁獲は約1千4百トンで、前年・平年を下回った(前年比41%、平年比38%)。

### ③ マイワシ

2019年のマイワシの漁獲量は約2千4百トンで、前年・平年を大きく下回った(前年比19%、平年比12%)。月別の漁獲動向では通常、県東部を主漁場として3月、6月、9月に漁獲がまとまるが、本年は年間を通して漁獲が少なかった。

山陰沖のマイワシ資源は2000年以降低水準期が続いていたが、2011年(漁獲量約2万5千トン)から漁獲が急増した。2012年以降も2014年(同850トン)を除き、約1万5千トン～4万トンの漁獲が続いており、マイワシ資源は回復傾向にあると考えられている。しかし、本年の漁獲量は2014年に次ぐ低い値となっており、今後のマイワシ資源の動向を注視する必要がある。

### ④ カタクチイワシ

2019年のカタクチイワシの漁獲量は約2千7百トンで、前年を上回り平年を下回った(前年比4732%、平年比55%)。月別の漁獲動向をみると4月～5月、8月～10月にまとまって漁獲があった。

### ⑤ ウルメイワシ

2019年のウルメイワシの漁獲量は約1万5千トンで、前年・平年を上回った(前年比260%、平年比398%)。近年、ウルメイワシの漁獲は春季と秋季に漁獲が多くなる二峰型の漁獲パターンで漁獲されている。2019年は春季に多く漁獲された

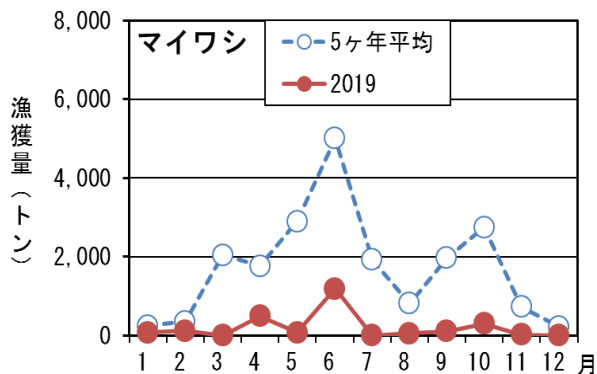


図4 中型まき網漁業によるマイワシの漁獲量

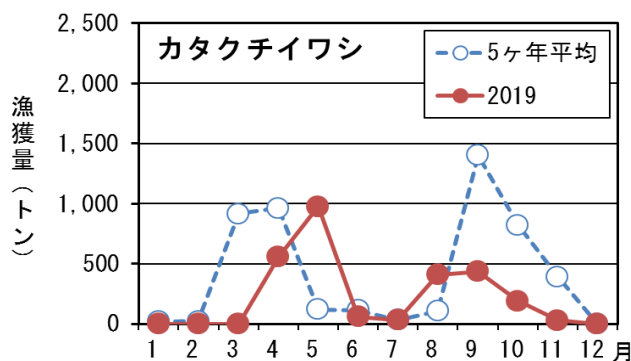


図5 中型まき網漁業によるカタクチイワシの漁獲量

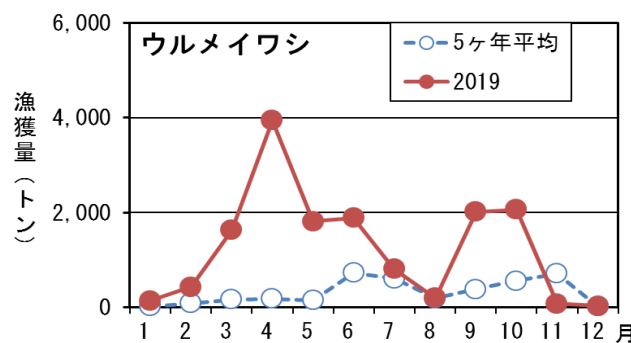


図6 中型まき網漁業によるウルメイワシの漁獲量

## 2. いか釣り漁業

ここでは、県内外のいか釣り漁船が水揚げするいか釣り漁業の代表港である浜田漁港(島根県浜田市)に水揚げされた主要イカ類(スルメイカ、ケンサキイカ)の漁獲動向をとりまとめた。対象とした漁業は、いか釣り漁業(5トン未満船)、小型いか釣り漁業(5トン以上30トン未満船)および中型いか釣り漁業(30トン以上)である。

### (1) スルメイカ

浜田漁港に水揚げされたスルメイカの2014年以降の水揚量および水揚金額、単価の経年変化を図7と図8に示した。

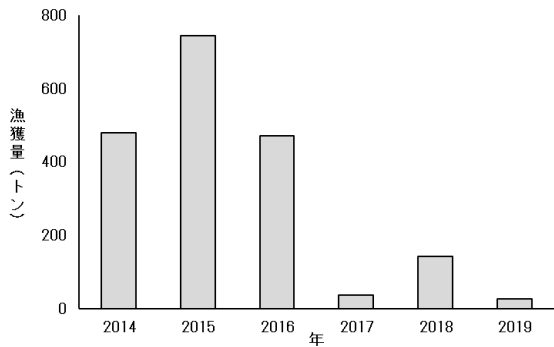


図7 浜田漁港におけるスルメイカの水揚量の経年変化

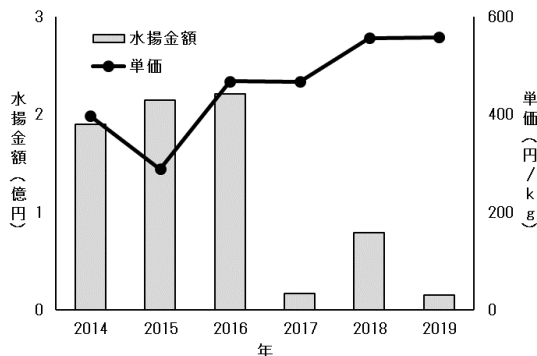


図8 浜田漁港に水揚げされたスルメイカの水揚金額と単価の経年変化

2019年の漁獲量は28トンで、前年(142トン)、平年(375トン)を大きく下回った(前年比20%、平年比7%)。2019年の水揚金額は約2千万円(前年比20%、平年比11%)であった。キログラムあたりの平均単価は558円で、平年(435円)の1.3倍であった。

スルメイカの月別の水揚動向を図9に示した。島根県沖では、例年、冬季～3月は冬季発生系群の産卵南下群が、3月以降は秋季発生系群の索餌北上群が漁獲対象となる。2019年は近年の漁獲の主体であった冬季発生系群の漁獲量が顕著に落ち込み、さらに、5月以降はほとんど漁獲が無い

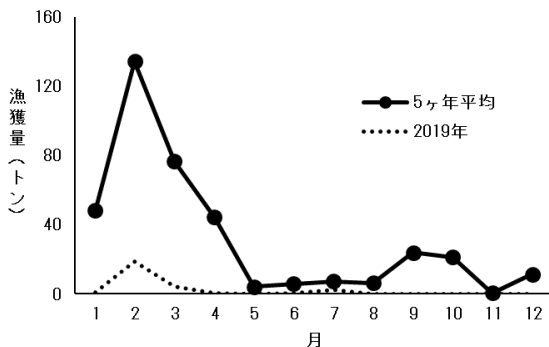


図9 浜田漁港におけるスルメイカの月別水揚動向

状況にあった。近年は両系群の資源状態が厳しい状況にあり※、さらに山陰沖への来遊量が少ないことが要因と考えられる。

※水産庁による令和元年度のスルメイカの資源評価では、冬季発生系群の資源水準は「低位」、秋季発生系群の資源水準は「中位」とされている。

## (2) ケンサキイカ

浜田漁港に水揚げされたケンサキイカの2014年以降の水揚量および水揚金額、単価の経年変化を図10と図11に示した。

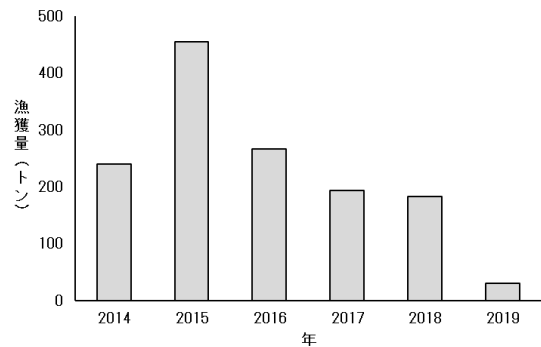


図10 浜田漁港におけるケンサキイカの水揚量の経年変化

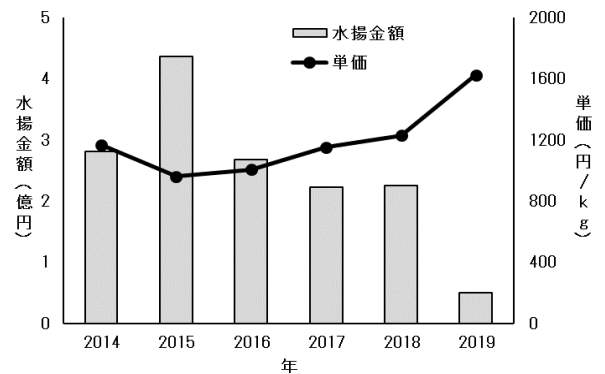


図11 浜田漁港に水揚げされたケンサキイカの水揚金額と単価の経年変化

2019年のケンサキイカの漁獲量は31トンで、前年(183トン)、平年(267トン)を大きく下回った(前年比17%、平年比11%)。水揚金額は約5千万円(前年比22%、平年比17%)であった。キログラムあたりの平均単価は1,623円で、平年(1,103円)の1.5倍程度であった。

ケンサキイカの月別の水揚動向を図12に示した。2019年のケンサキイカ漁は6月中旬から水揚量が増え始め、ケンサキイカ型が主体となる春夏来遊群(5月～8月)の漁獲量は平年を下回る27

トン（平年比 36%）、ブドウイカ型が主体となる秋季来遊群（9月～12月）も平年を下回る 0.6 トン（平年比 0.3%）であった。2006 年以降、春夏来遊群の漁況が不調である一方、秋季来遊群の漁況は好調である傾向が続いていた。しかしながら、秋季来遊群の漁獲量は、2011 年（1,095 トン）をピークに減少傾向にあり、特に 2019 年は直近年で最も漁況が悪かったことから、今後の資源動向を注視する必要がある。

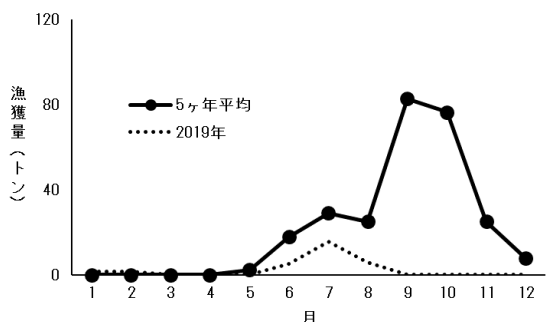


図 12 浜田漁港におけるケンサキイカの月別水揚げ動向

### 3. 沖合底びき網漁業（2 そうびき）

本県では現在 5 統が操業を行っている。本報告では、このうち浜田港を基地とする 4 統を対象に取りまとめを行った。ここでは統計上、漁期年を用い、1 漁期を 8 月 16 日から翌年 5 月 31 日までとした（6 月 1 日～8 月 15 日までは禁漁期間）。

#### (1) 全体の漁獲動向（図 13）

浜田港を基地とする沖合底びき網漁業（操業統数 4 統）の 2019 年漁期（2019 年 8 月 16 日～2020 年 5 月 31 日）の総漁獲量は 2,805 トン、総水揚げ金額は 13 億 6,738 万円であった。また、1 統当たりの漁獲量は 701 トン、水揚げ金額は 3 億

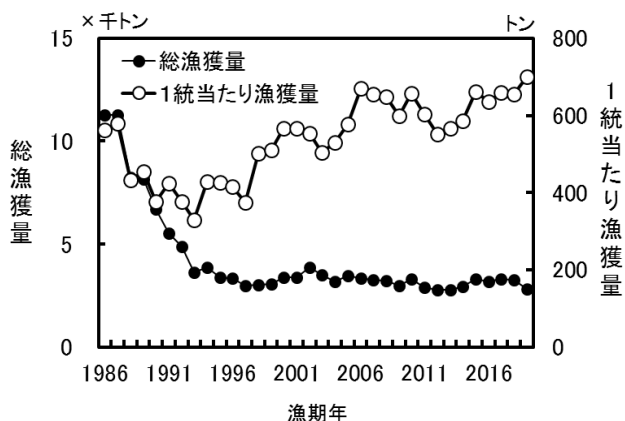


図 13 浜田港を基地とする沖合底びき網漁業における総漁獲量と 1 統当たり漁獲量の経年変化

4,185 万円で、漁獲量・水揚げ金額ともに平年を上回った（過去 10 年平均：639 トン、3 億 1,896 万円）。

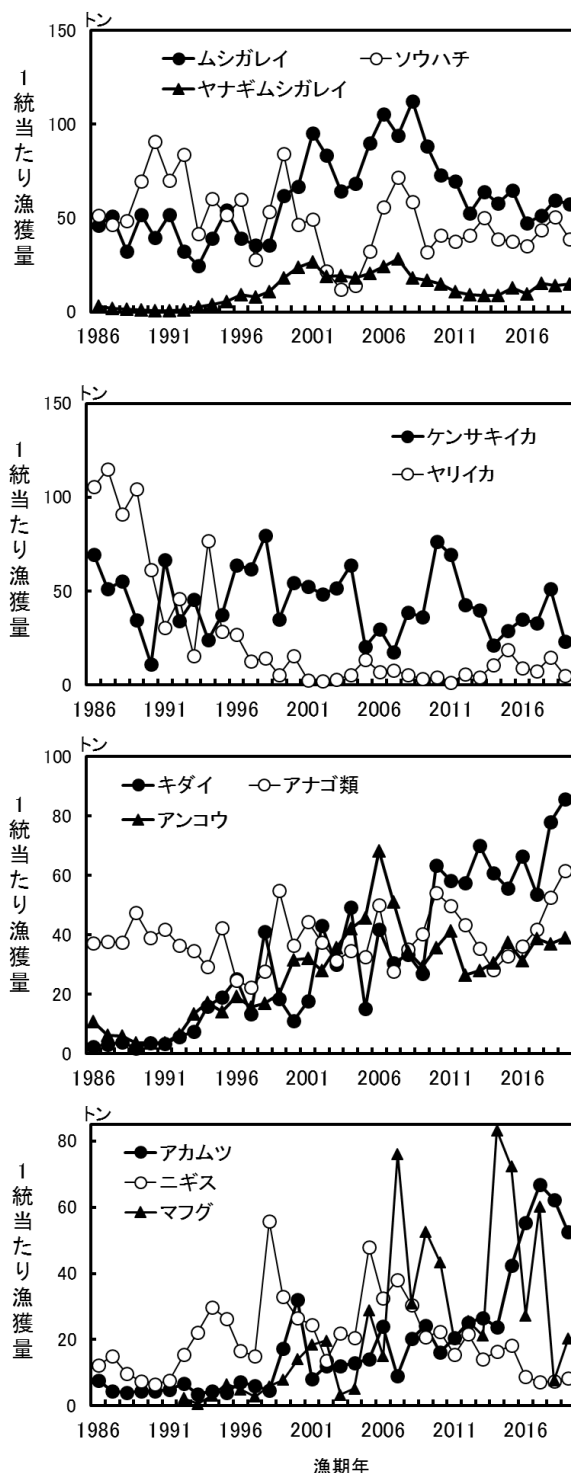


図 14 浜田港を基地とする沖合底びき網漁業における主要魚種の 1 統当たり漁獲量の経年変化

#### (2) 主要魚種の漁獲動向（図 14）

##### ① カレイ類

ムシガレイの CPUE は 58 トンで平年並、ソウハ

チの CPUE は 39 トンで平年並、ヤナギムシガレイの CPUE は 15 トンで平年の 1.2 倍の水揚げであった。

② イカ類

ケンサキイカの CPUE は 23 トンで平年の 5 割、ヤリイカの CPUE は 5 トンで平年の 7 割の水揚げとなった。

③ その他の魚類

アナゴ類の CPUE は 61 トンで平年の 1.5 倍、ニギスの CPUE は 8 トンで平年の 5 割の水揚げに留まった。また、アンコウの CPUE は 39 トンで平年の 1.2 倍の水揚げとなった。

アカムツの CPUE は 53 トンで、平年の 1.5 倍の水揚げとなった。

また、マフグの CPUE は 20 トンで、平年の 5 割の水揚げになった。キダイの CPUE は 86 トンで、平年の 1.5 倍の水揚げとなった。

この他、カワハギ類の CPUE は 15 トンで平年の 7 割、マトウダイの CPUE は 29 トンで平年の 1.8 倍の水揚げとなった。

4. 小型底びき網漁業第 1 種 (かけまわし)

小型底びき網漁業第 1 種 (以下、小底という) は山口県との県境から隠岐海峡にかけての水深 100~200m の海域を漁場とし、現在 41 隻が操業を行なっている。ここでは統計上、漁期年を用い、一漁期を 9 月 1 日から翌年 5 月 31 日までとした (6 月 1 日~8 月 31 日までは禁漁期間)。

(1) 全体の漁獲動向 (図 15)

2019 (R1) 年漁期 (2019 年 9 月 1 日~2020 年 5 月 31 日) の総漁獲量は 3,579 トン、総水揚金額

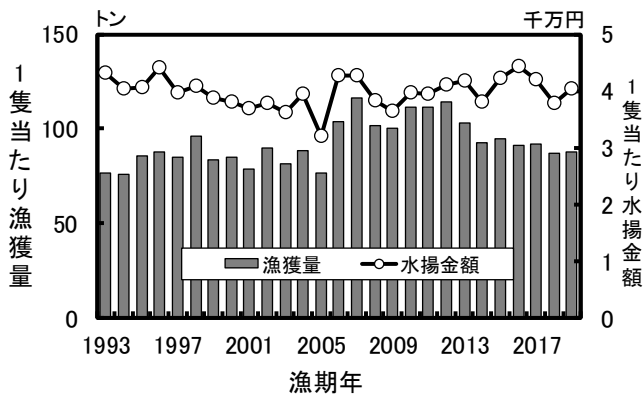


図 15 小型底びき網漁業における 1 隻当たり漁獲量と水揚金額の経年変化

は 16 億 5,133 万円であった。1 隻当たり漁獲量 (以下、CPUE) は 87.8 トン、水揚金額は 4,049 万円で、漁獲量では平年を 12% 下回り、水揚金額では平年と同様であった (過去 10 ヶ年平均; 99.8 トン、4,032 万円)。

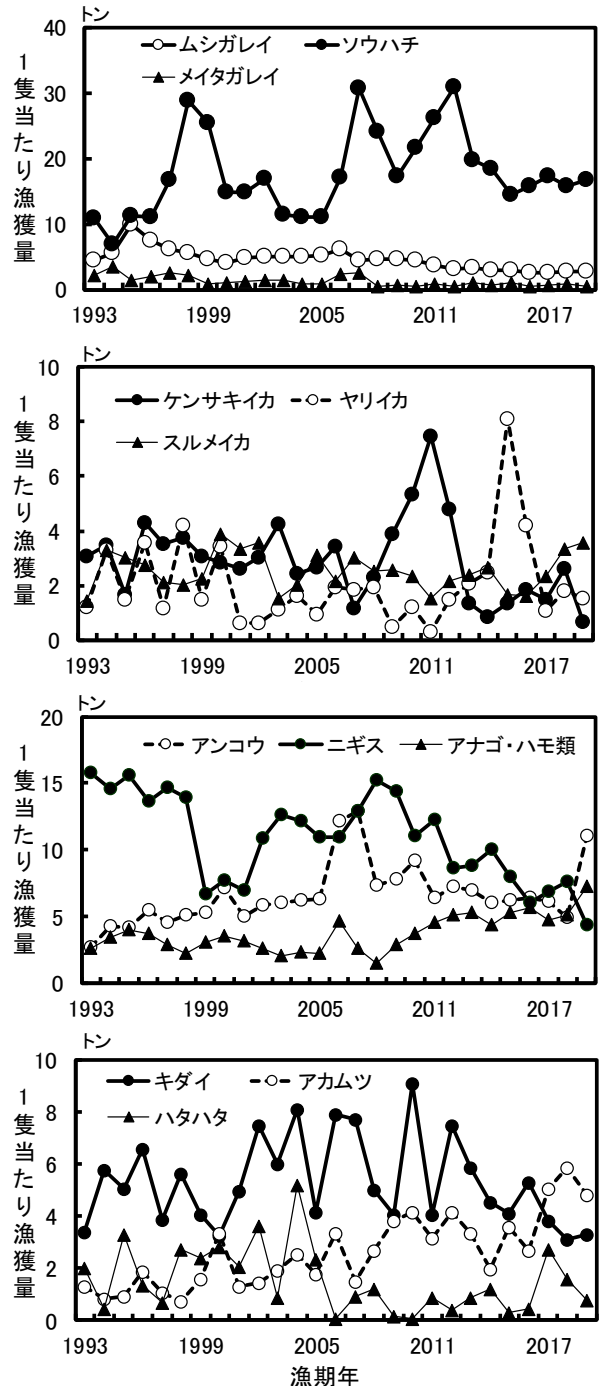


図 16 小型底びき網漁業における主要魚種の 1 隻当たり漁獲量の経年変化

(2) 主要魚種の漁獲動向 (図 16)

① カレイ類

ソウハチの CPUE は 16.8 トンで、前年の 1.1

倍で平年の 9 割の水揚げであった。ムシガレイの CPUE は 2.7 トンで、前年の 1.0 倍で平年の 8 割であった。メイタガレイの CPUE は 0.6 トンで、前年の 7 割で平年の 8 割であった。この他、ヤナギムシガレイの CPUE は 1.0 トン（平年の 7 割）、アカガレイの CPUE は 9.1 トン（平年の 1.8 倍）、ヒレグロの CPUE は 3.6 トン（平年の 4 割）であった。

## ② イカ類

ケンサキイカの CPUE は 0.7 トンで、前年・平年の 2 割の水揚げであった。ヤリイカの CPUE は 1.6 トンで、前年の 9 割、平年の 7 割であった。スルメイカの CPUE は 3.6 トンで、前年の 1.1 倍、平年の 1.6 倍であった。

## ③ その他の魚類

アカムツの CPUE は 4.8 トンで、前年の 8 割、平年の 1.3 倍の水揚げであった。この他、キダイの CPUE は 3.3 トン（平年の 6 割）、ニギスの CPUE は 4.3 トン（平年の 5 割）、アンコウの CPUE は 11.0 トン（平年の 1.6 倍）、アナゴ・ハモ類の CPUE は 7.2 トン（平年の 1.5 倍）、ハタハタの CPUE は 0.7 トン（平年の 9 割）の水揚げであった。

## 5. ばいかご漁業

石見海域におけるばいかご漁業は、小型底びき網漁業（第 1 種）の休漁中（6～8 月）に行われる。漁場は本県沖合の水深 200m 前後、令和元年（2019）年は 3 隻が操業した。

解析に用いた資料は、当センター漁獲管理情報処理システムによる漁獲統計と各漁業者に記帳を依頼している標本船野帳である。これらの資料をもとに、漁獲動向、漁場利用等について検討を行った。なお、漁獲量および水揚げ金額の 9 割程度占めるエッチュウバイについては、別記のエッチュウバイの資源管理に関する研究を参照のこと。

### （1）漁獲動向

2019 年のばいかご漁業における総漁獲量は 79.2 トン（前年度比 136.4%）、総水揚げ金額は 4,020 万円（前年度比 127.4%）であり前年より増加したものの、過去と比較するとその水準は低い（図 17）。

平成元年（1989）の漁獲量は 175 トン、その後増減を繰り返しながら減少傾向を示し、平成 21 年

（2009）には 100 トンを下回った。その後も低水準が継続している。漁獲量減少の原因としては、操業隻数の減少等が考えられ、平成 20 年代の初めまでは 6～7 隻が操業していたが、徐々に減少し平成 28 年（2016）年以降は 3 隻のみの操業となっている。

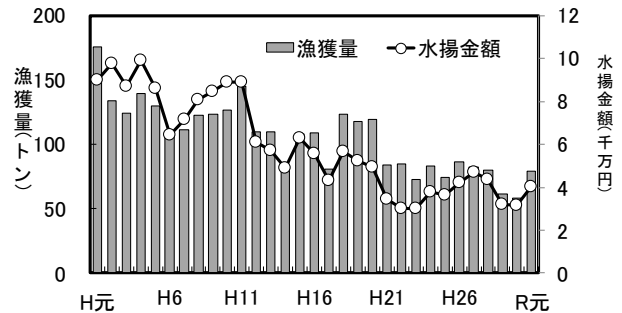


図 17 石見海域におけるばいかご漁業の漁獲量と水揚げ金額の推移

水揚げ金額も漁獲量の減少に伴って低下しているが、平成 15 年（2003）から平成 26 年（2014）年は漁獲の大部分をしめるエッチュウバイの価格が 500 円/kg を下回った期間であり、その影響も大きいと考えられる。

1 隻当たりの漁獲量は 26.4 トン（前年度比 136.4%）で、平成 28 年（2016）年に続き 2 番目に高い水準であった。

1 隻当たり漁獲量は 26.4 トン（前年比 136.4%）で、平成 28 年（2016）年に続き 2 番目に高い水準であった（図 18）。1 隻当たり水揚げ金額は 1,340 万円（前年比 127.4%）、近年ではこれも平成 28 年に続き高い水準となった。

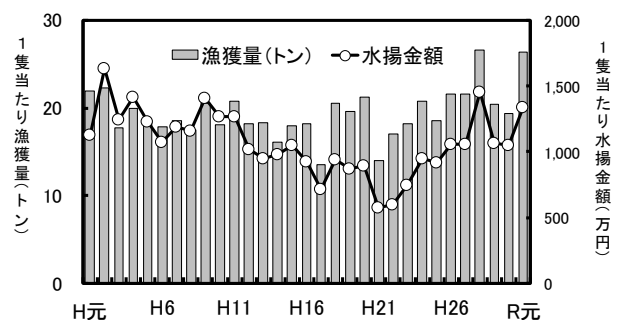


図 18 石見海域におけるばいかご漁業の 1 隻当たり漁獲量と水揚げ金額の推移

1 隻当たり漁獲量は、平成 17 年（2005）年および平成 21 年（2009）年に大きく減少したが、平成元年以降 20 トン程度で推移している。

1 隻当たり水揚金額は平成元年以降、増減を繰り返しながら減少して、平成 21 年には 576 万円まで低下したが、その後回復して平成 26 年(2014)以降では 1,000 万円を超えている。

漁獲の主体となっているエッチュウバイの資源水準が高いため、1 隻当たりの漁獲量および水揚金額はそれを反映して高くなっている。